

Surgical Intervention Strategy for Postoperative Chylothorax Following Lung Resection

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2015-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 内田, 真介 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001724

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1627 号

Surgical Intervention Strategy for Postoperative Chylothorax Following Lung Resection

(肺切除後の術後乳び胸に対する外科的治療戦略)

内田 真介 (うちだ しんすけ)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、術後乳び胸の治療経過を調べ、早期に再手術を行うべき症例の予測因子を明らかにした臨床的に意義ある論文である。

肺切除後の術後乳び胸は重要な合併症の一つであるが、その管理方法はいまだ統一されておらず、乳び胸の中には保存的治療で軽快せず、再手術を余儀なくされる場合がある。本論文では 2008 年 1 月から 2012 年 9 月までに手術を施行した原発性肺癌 1,241 例のうち、術後に乳び胸を発症した 50 例 (4%) を対象とした。脂質制限食のみで軽快した症例は 30 例、胸膜癒着療法を施行した症例は 11 例、再手術を要した症例は 9 例で再手術まで要した日数は中央値 5.5 日 (3-12 日) であった。再手術後の合併症例や死亡例はなく、全例で乳び胸の改善を得た。再手術群 9 例および保存的治療群 41 例に分け、術前併存疾患や手術因子、術後因子を比較し、再手術を要する乳び胸の予測因子の検討を行ったところ、再手術群において術直後からのドレーン排液量 $448 \pm 189 \text{ml}/12\text{h}$ は、非再手術群の $298 \pm 117 \text{ml}/12\text{h}$ に比べ有意に多かった ($p=0.003$)。多変量解析により、術直後からのドレーン排液量が多いことが再手術の予測因子となった ($p=0.01$)。今までは、乳び胸と診断し食事再開後のドレーン排液量を観察した後に再手術を行っていたが、今回の検討から、すでに術直後のドレーン排液量が多い場合は、再手術を要する乳び胸である可能性があり、再手術を念頭においた管理が必要であると考えられた。術後合併症に対する治療戦略として臨床的意義のある論文と考えられる。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。